

●リバイバル戦記コレクション

証言・昭和の戦争

小林 健ほか

戦艦陸奥ミッドウェー海戦従軍記

わが空母龍驤二代

海は燃えている

あゝ瑞鶴飛行隊帰投せず

戦艦「大和」主砲指揮所に 地獄を見た

光人社刊

●リバイバル戦記コレクション

証言・昭和の戦争

小林 健ほか

戦艦陸奥ミッドウエー海戦証言記

わが空母龍驤二代

海は燃えている

あゝ瑞鶴飛行隊帰投せず

戦艦大和の主砲指揮所に 地獄を見た

光人社刊

証言|昭和の戦争★リバイバル戦記コレクション

戦艦「大和」主砲指揮所に 地獄を見た

1989年 12月 10日 印刷

1989年 12月 16日 発行

著 者 小林 健^は_か

発行者 川島 裕

発行所 株式会社 光人社

東京都千代田区九段北1-9-11

振替番号／東京7-54693番

電話番号／東京03(265)1864～7

本文印刷 株式会社堀内印刷所

色彩印刷 有限会社興伸社

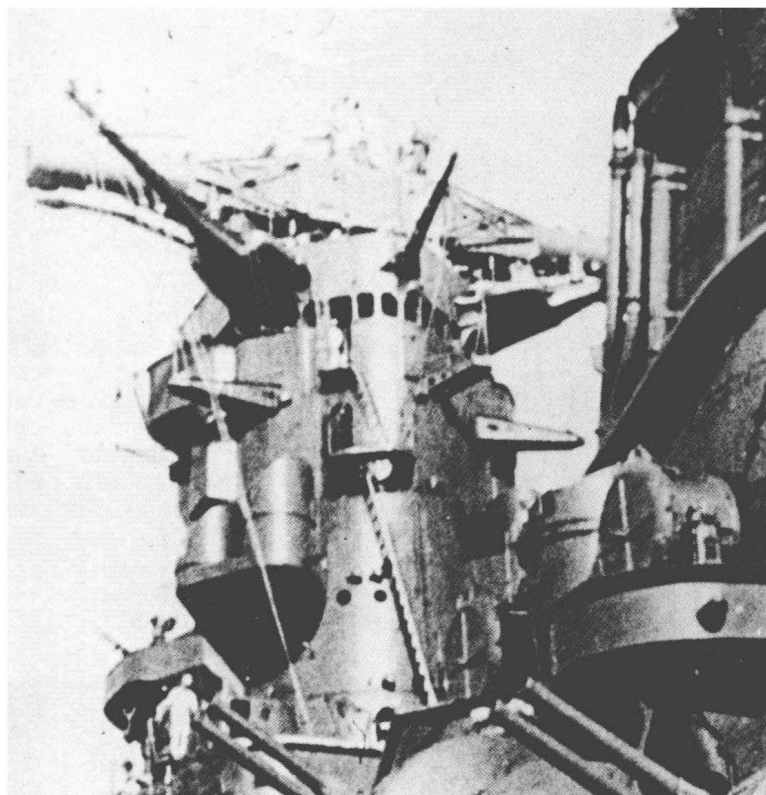
製本所 有限会社松栄堂製本所

企画編集／牛嶋義勝 校正製作／内海勉・川岡篤

乱丁、落丁のものはお取り替え致します。本文は中性紙を使用

© 1989 Printed in Japan

ISBN4-7698-0478-4 C0095



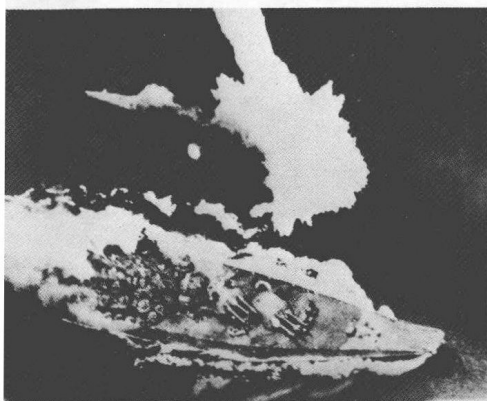
後ろから見た大和型の艦橋。主砲の射程距離は42キロメートルにおよび水平線上にわずかに姿をあらわした敵艦を砲撃するため、海面上約40メートルの高所に15メートル測距儀を置き、さらに各種の設備を設けた。



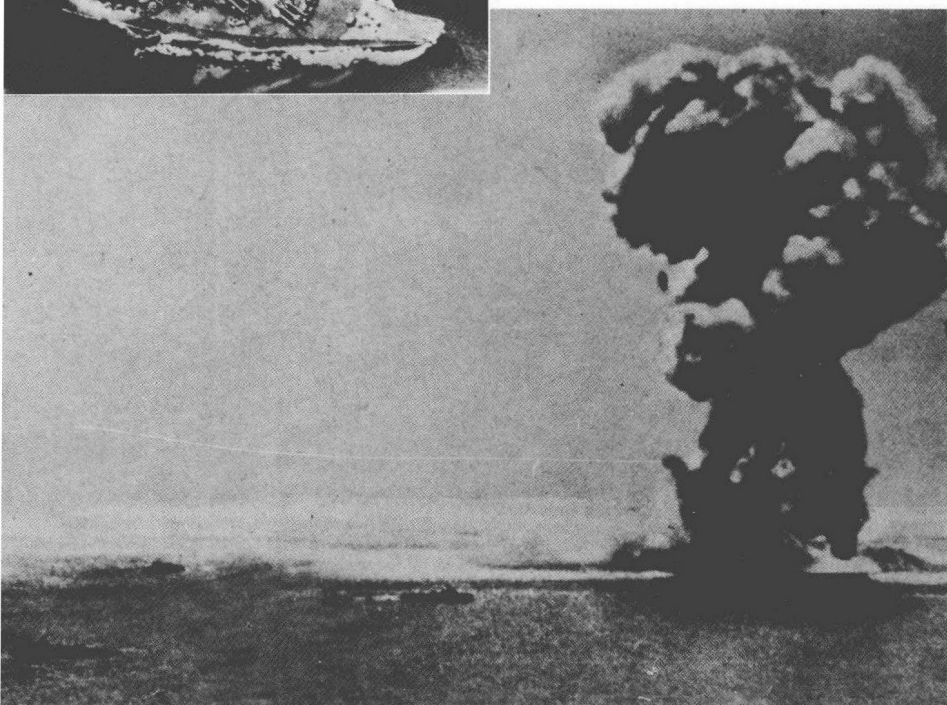
全力子行運転中の戦艦「大和」。昭和16年10月2日、宿毛湾沖標中間を27.46ノットで暴進する。悪天候による波浪をものともせず、すさまじい水煙をたてながら突き進む迫力に富んだ雄姿。



上方から見た大和型戦艦（右上写真の手前）。上空を飛ぶのは九七式艦上攻撃機。（左上）昭和19年10月24日、ヘルダイバー艦爆の急降下爆撃により「大和」艦首部に爆弾が命中した瞬間。しかし、損傷は軽微であったといわれている。



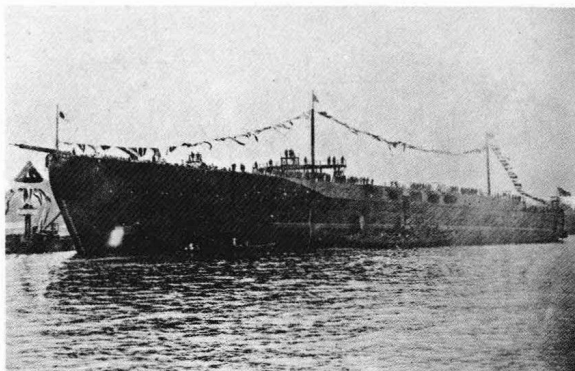
昭和20年4月6日に徳山沖を出撃した「大和」——米機第1波の急降下爆撃により爆弾2発と魚雷1本が命中した。



戦艦「大和」の最後——大爆発によって、高さ2000フィートにもおよぶ巨大なキノコ雲が立ちのぼった。壮絶なる「大和」の最後を見とる3隻の駆逐艦は、左から、「霞」「初霜」「冬月」である。



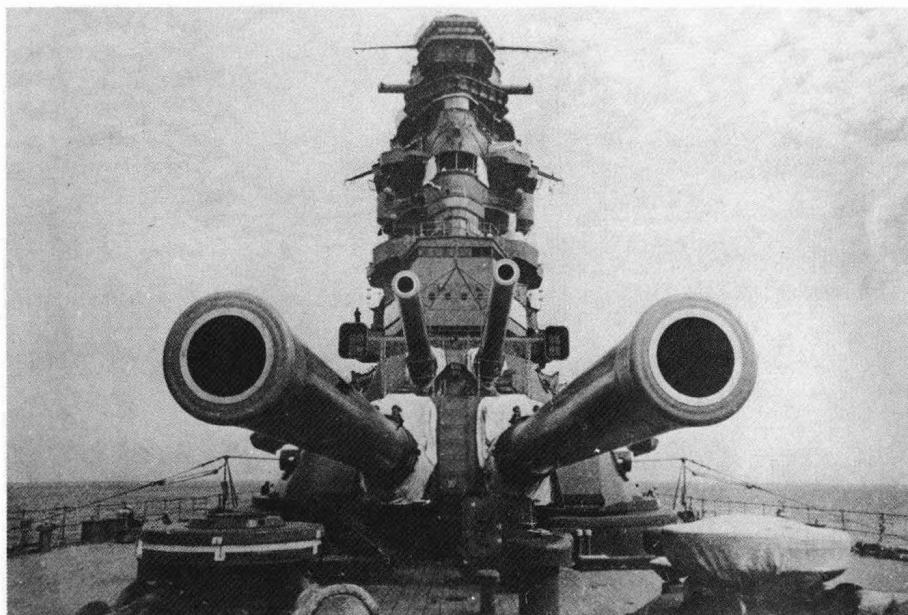
佐々木 確治 一等水兵



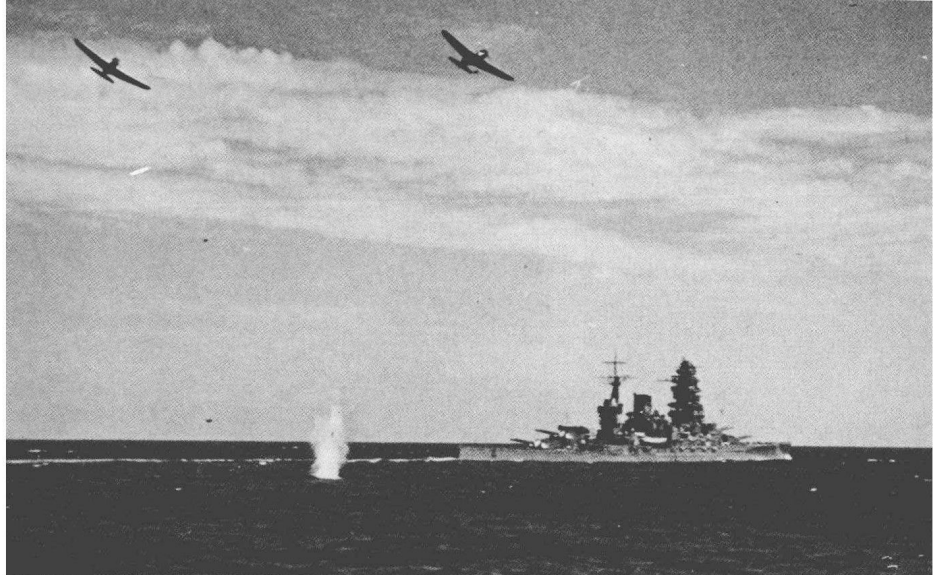
大正9年5月31日、進水後、横須賀港内三ヶ保沖に静止した「陸奥」



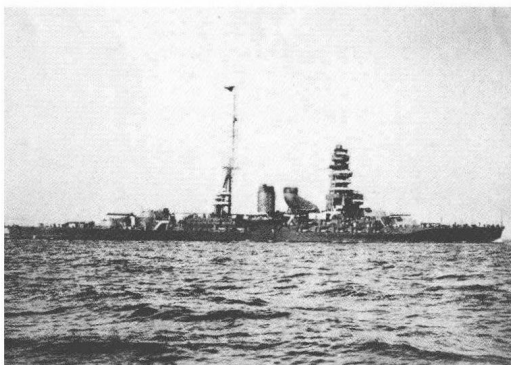
完成当時の「陸奥」——ワシントン軍縮会議までに完成を既成事実とするため工事がいそがれたが、艀装などが未済の状態で見送られ就役した。前橋楼にはまだ10メートル測距儀が装備されていない。



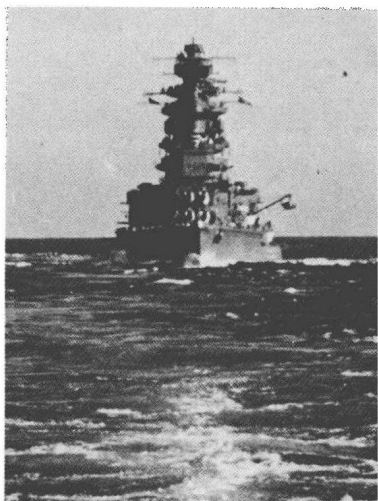
艦首部からのぞんだ「陸奥」の主砲と前橋楼——昭和16年ごろの姿と思われる。40センチ砲塔の甲鉄の厚さは前橋が500ミリ、砲塔旋回部の重量は1024トンもあったという。



昭和15～16年ごろ、九七式艦上攻撃機の対艦攻撃訓練の目標艦をつとめる「陸奥」——当時、海上主戦兵力は戦艦であると信じられており、戦艦は航空部隊に胸を貸す気分で訓練していたのだろう。

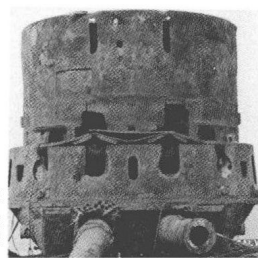
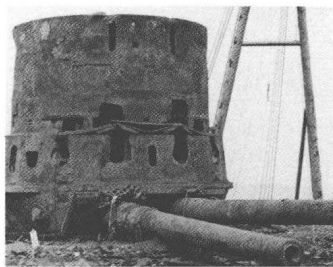


和2年10月20日、横浜沖で举行された大演習観艦において、「陸奥」は、御召艦の大役を果たした。



大正13年10月17日、大演習中、「長門」より統航する「陸奥」をのぞんだ光景。

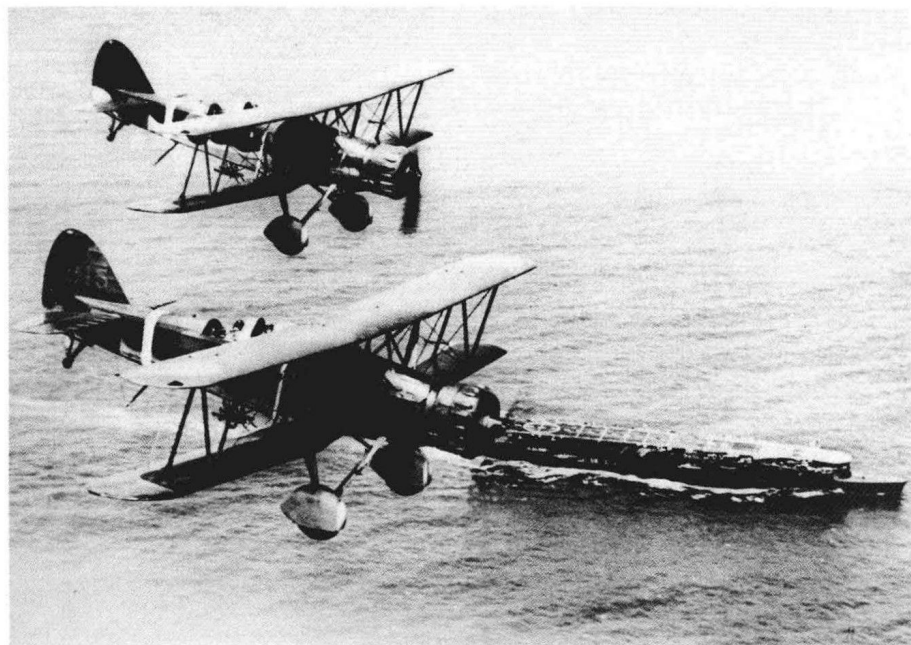
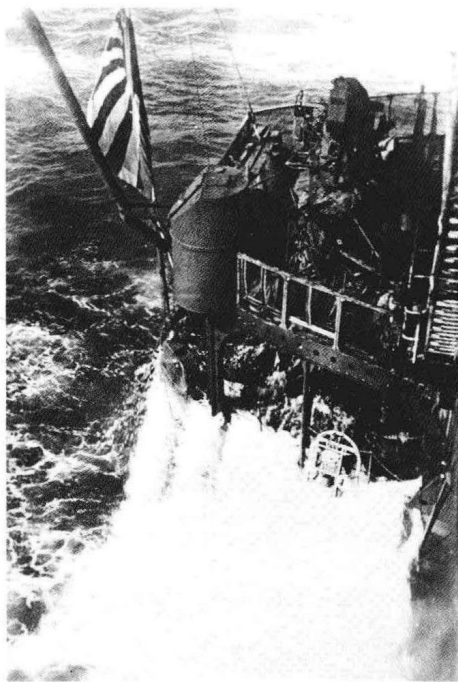
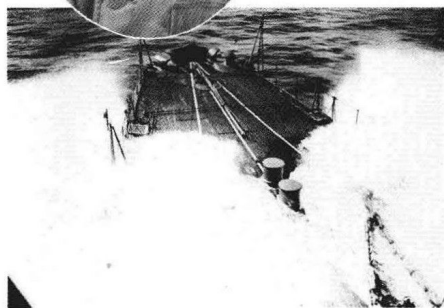
沈没から27年後に「陸奥」の引き揚げ作業がおこなわれた。写真は、昭和45年8月23日、柱島沖約4キロの海底に眠る「陸奥」の船体から引き揚げられた4番砲塔である。



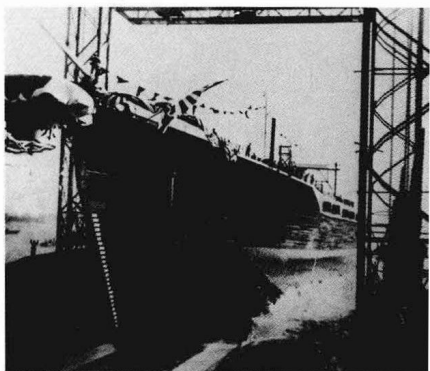
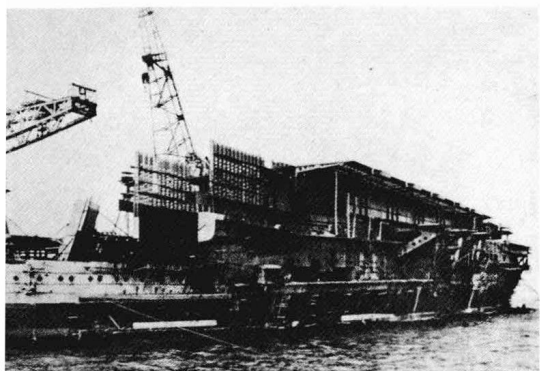


玉手修司整曹長

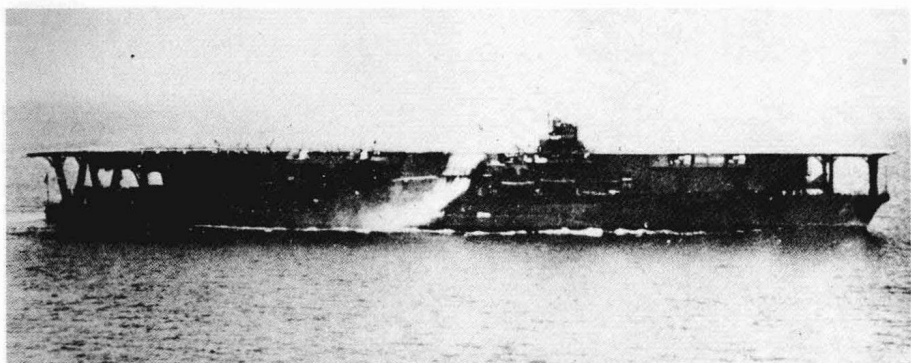
怒濤を蹴って進航する「龍驤」——昭和12年8月14日の撮影。上海方面の航空戦に参加するため 進撃中のシーン。



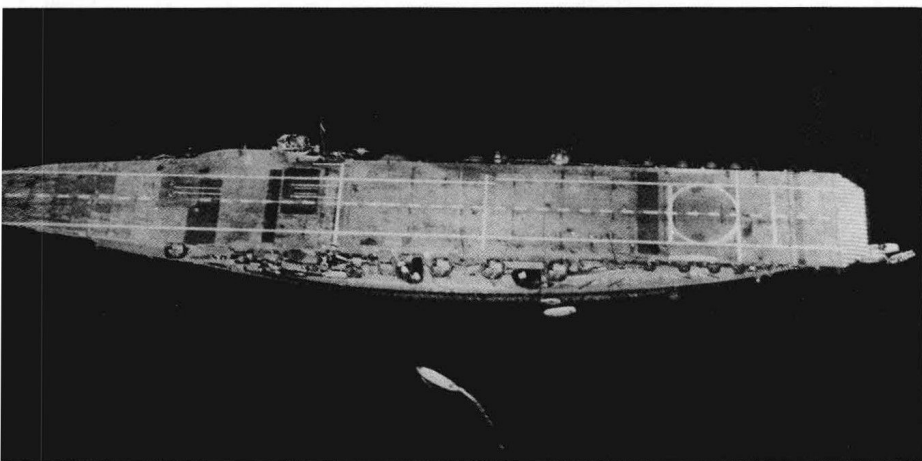
昭和13年、九六艦攻の機上から撮影の「龍驤」。第4艦隊事件対策工事後の本艦の航空写真はきわめて珍しく、前甲板や艦橋前壁、飛行甲板前端などの状況がよくわかる。



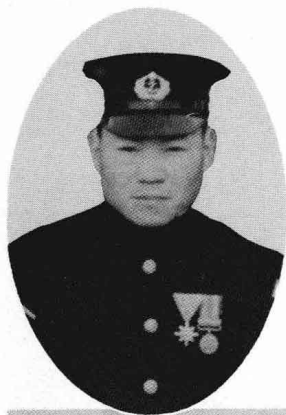
大正10年11月17日、神戸川崎造船所で進水する戦艦「加賀」(右上)。ワシントン軍縮条約により廃棄処分ときまったが、関東大震災によって破損した「天城」のかわりとして空母に改造された(左上)。



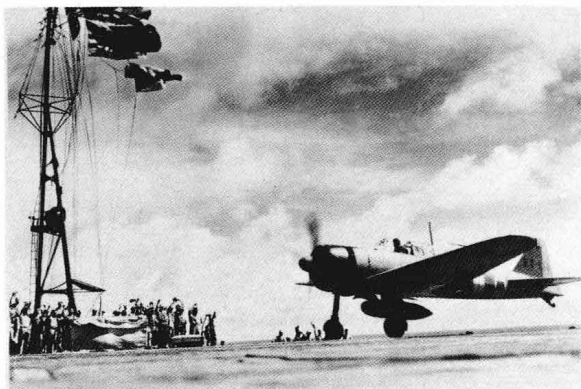
着艦作業中の「加賀」——昭和11年の撮影。煙突から白煙水蒸気が下方に放出されているのは、飛行甲板に悪気流を生じさせないように熱煙冷却装置を使用しているため。



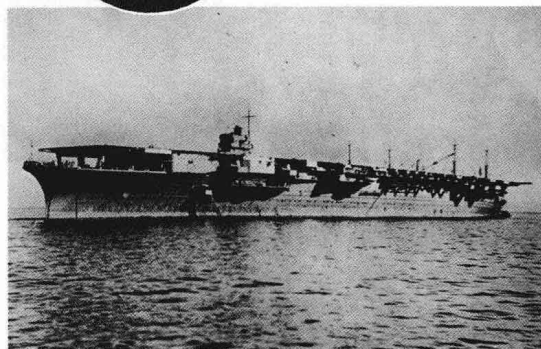
上空から見た改装後の「加賀」——飛行甲板はできるかぎり延長され、その長さは船体を上まわった。前部に延長された格納庫には新たにエレベーターが設けられ、合計3基となった。



渡辺義雄 上整曹



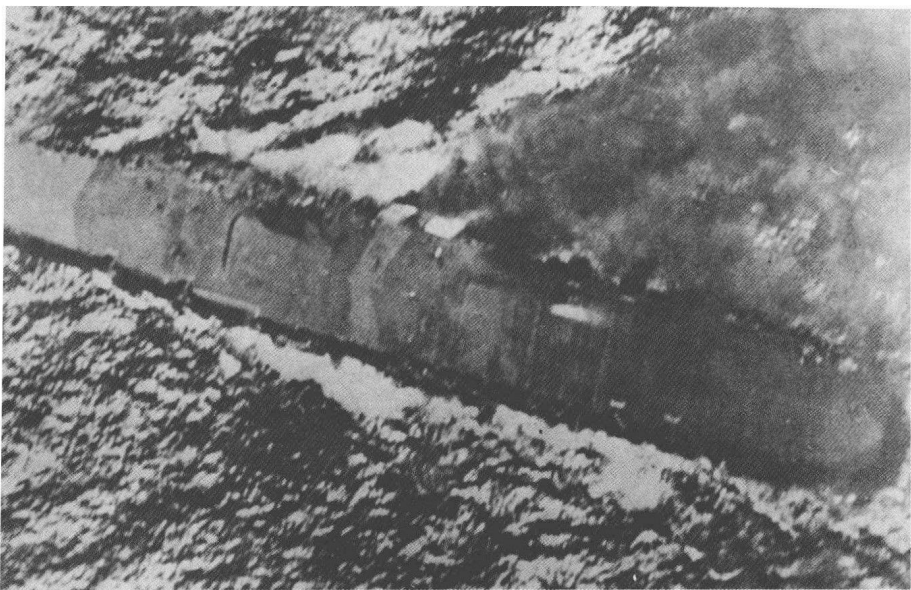
昭和17年1月20日、ラバウル攻撃のため、「瑞鶴」を発進する零戦。



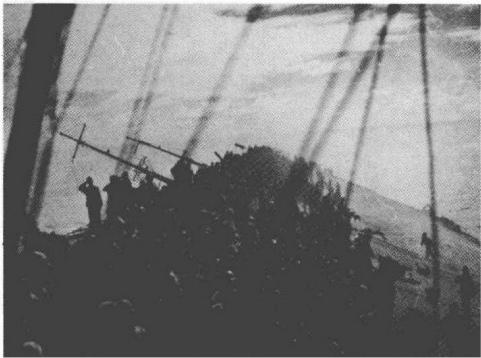
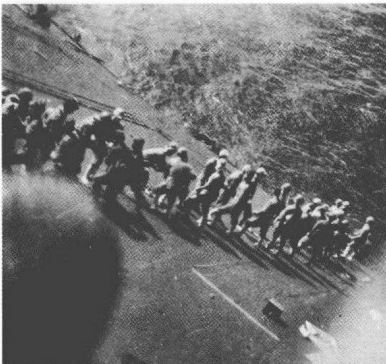
昭和16年9月25日、第1航空艦隊
第5航空戦隊に編入された「瑞鶴」

昭和17年3月、インド洋に行く機動部隊。「瑞鶴」の左舷前部高角砲後部よりみた光景。本隊は1本の単縦陣となって、ちょうど「瑞鶴」の手前で左に変針をしたところ。

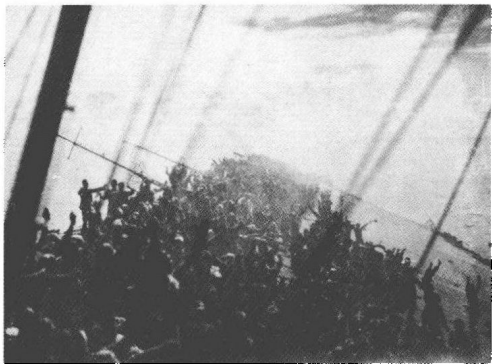




米空母機が直下にみた空母「瑞鶴」——第1次攻撃後の姿らしく、艦は火災により黒煙を上げているが、飛行甲板の被害はそれほどでもなく、まだかなりの速力を維持しているようである。



第2次攻撃後、第3次攻撃にそなえて銃側に弾丸を補給しているところ。第1次攻撃における船体傾斜は6度であったが、第3次攻撃において7本の魚雷をうけたため傾斜は20度に達した。



傾斜が23度に増大したところで軍艦旗降下が行なわれた。甲板の右端に集合した乗員が敬礼しつつ、降下する旗を注目している(右中)。つづいて行なわれた“万歳三唱”の瞬間(右下)。これより16分後、「瑞鶴」はその姿を没した。

証言 昭和の戦争——リバイバル戦記コレクション

戦艦「大和」主砲指揮所に地獄を見た

目次

戦艦「大和」主砲指揮所に地獄を見た

.....小林 健

13

戦艦「陸奥」ミッドウェー海戦従軍記

.....佐々木 確治

71

わが空母「龍驤」一代

.....玉手 修司

131

海は燃えている

.....小谷 光四郎

199

あゝ「瑞鶴」飛行隊帰投せず

.....渡辺 義雄

245

解説／高野 弘

303

装幀
森下年昭

戦艦「大和」主砲指揮所に地獄を見た
艦橋トップ／海面上七十メートルに起こった奇蹟——小林 健

Ⅰ 初陣のレイテ沖

私が「大和」に乗艦したのは昭和十九年九月であった。師範徴兵として海軍入りし、佐世保軍港から戦艦「榛名」に便乗して一路南下し、台湾、香港をへてシンガポール沖に投錨していた「大和」へと着任したのである。

その「大和」をはじめてみたとき、あまりの大きさにどぎもをぬかれてしまった。フネというより、私にはまるで小山をみるような感じであった。とくに巨大さを感じたのは、菊のご紋章がついている艦首下から、横腹をみながら全体をながめたときであった。

これが戦艦「大和」だ、オレはこの艦に乗ることになったんだ——私の心に安堵感と、いいような誇りとがこみあげてきたのもこのときであった。

この「大和」へ乗艦するまえに、シンガポールの元英軍兵舎で一週間ほど待機していたのであったが、このシンガポールの山々と海の美しさは、いまもってわすれ去ることができないほど私に印象づけている。破壊されたジョホール水道付近の港湾施設も大部分が復旧されており、赤道直下で毎日あつい日がつづいたものの、夜ともなると南十字星が美しくかがやき、南国の詩がそこにあるように感じられたものである。